

国立情報学研究所ニュース 第2号

国立情報学研究所創設記念式典及び祝賀会の開催



国立情報学研究所では、10月6日、学術総合センターにおいて、約220名の関係者のご出席をいただき、創設記念式典及び祝賀会を挙行了しました。式典では、猪瀬博所長から式辞の後、大島理森文部大臣、戸張正雄国立国会図書館長、北原保雄筑波大学長から祝辞をいただきました。また、祝賀会では、森山真弓衆議院議員、木田宏本研究所参与(新国立劇場運営財団顧問)から祝辞をいただき、岡本道雄本研究所参与(国際高等研究所特別顧問)に乾杯のご発声をいただきました。

式辞 猪瀬博 国立情報学研究所長

本日ここに、国立情報学研究所創設記念式典を挙げるに当たり、皆様にはご多忙中にもかかわらず、ご来席を賜りまして、誠にありがとうございます。厚くお礼を申し上げます。

国立情報学研究所は、その前身である学術情報センターを母体といたしまして、我が国の情報分野の研究の飛躍的推進を図るとともに、先端的な学術情報基盤を構築・提供することによってあらゆる学問分野の発展と産業・文化・国民生活の向上に大きく貢献するため、さらに、情報の専門家の育成にも資するため、情報分野における総合的な研究を行う大学共同利用機関として、本年四月に創設されました。

近年、我が国では高度情報通信社会に向けた動きが一段と加速し、それに伴い、情報に関する研究の飛躍的な推進の必要性が強く指摘されるようになりました。本研究所が対象とする「情報学」は二十一世紀を指向した新しい学問分野であります。この情報学は情報に関する広範な研究領域に総合的に関わる学問であり、計算機科学や情報工学だけでなく生命科学や人文・社会科学の様々な分野を包含するものであります。情報学は、各分野における研究の深化と分野間の連携による学際的な研究活動を通じて今後飛躍的に発展し、その結果、社会経済活動のあらゆる側面を支える学問的基盤になると期待されております。

このように考えますと、情報学における研究の成果は、広く社会に提供されなければなりません。本研究所は、基礎研究に力を入れるとともに、その成果を情報資源やネットワーク環境の整備など、学術情報基盤の構築のために実証的に適用していくことが重要と考えております。また学術情報基盤の構築のために解決

すべき研究課題を取り上げて研究開発を行い、その成果を実用化することにより、広く一般社会に役立てることも重視しております。さらにインターネットの普及や様々な情報通信機器の発達により社会の情報化が進展する一方で、セキュリティの確保、プライバシーの保護など新たな課題も発生しております。情報学研究においては、こうした社会的問題に対処するための方策を探求することも求められております。

さらに、本研究所は、その前身の学術情報センターが行ってきた諸事業、すなわち学術情報基盤の整備と運用、利用者への教育研修機会の提供など、学術情報及び情報システムに関する諸事業を継続・発展させ、自然科学のみならず人文・社会科学の広範囲な領域に関する学術情報を、国内・国外の研究者に迅速・的確に提供するという大きな役割を今後も担ってまいることとしております。

本日、ここに創設記念式典を迎えることができましたことは、文部省、大蔵省をはじめ、関係各機関の皆様方の深いご理解とご支援の賜ものであり、この場をお借りして、関係の皆様方に深く感謝を申し上げます。

高度情報通信社会の進展に伴いまして、本研究所が情報学研究と学術情報流通の中心機関として担うべき役割は一層重要性が増すものと考えます。このような時代の要請に適切に対応していくべく、教職員一同は心新たに、目的達成のために鋭意努力を重ねてまいり所存でございますので、ご列席の皆様方の一層のご指導、ご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。ご挨拶といたします。

祝辞 大島理森 文部大臣



本日、ここに、国立情報学研究所創設記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

二十一世紀を目前にした今日、先端的な情報技術を活用して、ゆとりと潤いを実感できる活力ある高度情報通信社会を形成していく上で、教育はもとより、学術研究が果たすべき役割は益々重要になってきております。

このような状況を踏まえ、このたび、我が国における情報分野の学術研究の飛躍的推進を図り、もってあらゆる学問分野の発展並びに産業や国民生活の向上に貢献するために、国立情報学研究所が創設されましたことは、誠に意義深いことであります。

本研究所においては、基礎から応用にわたる総合的な研究開発を通じて、高度情報通信社会の学問的基盤となる情報学を体系化し、発展させることを目標としています。また、旧学術情報センターにおいて開発された情報ネットワークや学術データベース等の資源を受け継ぎ、更に先端的な学術情報基盤の開発整備を推進することも本研究所の重要な任務であります。

今後、その研究成果を広く世界に向けて発信され、現代社会が直面する様々な課題への取り組みに大いに活用されることを期待いたします。

さらに、本研究所が、国の内外の研究機関と連携・協力して先進的な共同研究プロジェクトを展開することにより、世界の第一線の研究者から注目される研究機関として大きく発展し、我が国社会や国際社会の期待に積極的に応えていかれることを心から祈念いたします。

終わりに、本研究所の設立に御尽力された猪瀬所長はじめ関係各位のこれまでの御労苦に深く敬意を表しますとともに、御臨席の皆様方におかれましては、本研究所に一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます、お祝いの言葉といたします。

祝辞 戸張正雄 国立国会図書館長



本日ここに、国立情報学研究所の創設記念式典が挙行されるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

国立情報学研究所の意義を語るには、その前身たる学術情報センターの歴史に触れざるを得ないのであります。即ち、学術情報センターは、これまで十四年余の間、高度な技術を駆使して、全国に散在する学術情報を集め、整理し、大学等で研究する方々に提供する事業を展開してこられました。しかも、如何にすれば速やかにかつ的確に提供できるかということの研究しながら実践してこられました。その御功績は極めて高いものがあると信じます。学術情報ネットワーク、大学図書館等の蔵書データベース、研究成果等のデータベース、学協会雑誌を対象にした電子図書館など、研究に携われる方々にとって、これらの活用は絶対に欠くべからざるものでありましょう。私ども国立国会図書館もこの過程において多くのことを教えていただきました。一方、データ提供の面でいささかお役に立たたことを誇りに存じている所であります。

以上のような優れた業績を挙げてこられた学術情報センターに対して、社会と時代はさらに大きな役割を果たしていただくことを期待いたしました。即ち、これまでの事業の継続発展に加えて、情報学に関する総合的研究を行い情報専門家の育成にも貢献する国立情報学研究所への発展であります。およそ三年間の慎重な御検討を経て本年四月発足されたのであります。

いつの時代でも情報というものは重要なものであります。ひとり今日だけの問題ではありません。しかし情報に係る技術機器の発展の著しい今日、よその国の情報を見ながら特にその重要性が強調されることには理由のあることであると存じます。まさにこの時、国立情報学研究所が創設されました。情報とはどんなものなのか、その情報を如何にして集め、どう整理し、如何に早く実用に提供するか、そして人材を如何に養成するか、研究と実践にすでに赫赫たる実績をお持ちの国立情報学研究所に期待する所、極めて大なるものがあります。創設おめでとうございます。

祝辞 北原保雄 筑波大学長



今日は、国立情報学研究所の創設を記念する栄えある式典にご招待をいただきまして、まことにありがたく、光栄に存じます。ご指名にあずかり、僭越ではありますが、ひと言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

国立情報学研究所は、我が国の情報学における中核的研究機関として、前身の学術情報センターの改組・拡充により、記念すべき二〇〇〇年という年に創設されました。このことは、猪瀬所長をはじめとする関係各位の長年のご努力と文部省当局のご支援の賜物であり、心からお祝いを申し上げます。

実は、私ども筑波大学は、この度の創設に際しまして特別な感慨を持っております。

と申しますのも、前身の学術情報センターが昭和六十一年四月に設立されてから、本年の二月まで、本学の大塚校舎の一部に活動の拠点を置いてこられたからであります。

年代を経た狭隘な建物で、大変なご不自由があったことと思いますが、あの大塚の地を舞台として、二十名前後の小さな組織から、今日の研究所創設につながる国際的にも有数の研究機関に発展を遂げられていく「成長物語」の一部始終を身近に拝見させていただくことができました。私どもにとって、まことに慶びとするところであり、同時にその成長・発展を担われた皆様へ深甚の敬意を表するものであります。

さて、国立情報学研究所は、大学共同利用機関として設立されております。目指されるところは、計算機科学から人文・社会科学までのさまざまな分野を包含する、二十一世紀を指向した新しい学問分野としての「情報学」研究ということであります。

この点では我が国の関連分野の研究の「メッカ」としての機能を果たすことが大いに期待される所です。

また、そのような研究面にとどまらず、前身の学術情報センター以来、大学との緊密な連携によって形成されてきた、世界に冠たる学術データベースの形成事業や、全国の大学等を網羅した高速の学術情報ネット

祝賀会での来賓祝辞



猪瀬博所長挨拶

森山真弓衆議院議員



木田宏参与

岡本道雄参与



ワークの運用などの諸事業を、発展的に継承されており、大学の教育研究活動に対する、量り知れない恩恵に深く感謝するものであります。

したがいまして、私ども大学にとって、国立情報学研究所の創設は単に一研究所の創設ではなく、研究と学術情報基盤整備の最大の後継者の誕生であり、大きな慶びと期待を持って歓迎すべき出来事と受け止めております。

私ども大学も激動の時代の中で、新たな世紀に向かって、改革の努力を続けているところであります。この度の国立情報学研究所の創設を契機として、更に、連携を深め、我が国の研究水準や学術情報基盤の向上に資する努力をして参りたいと存じます。

最後に、国立情報学研究所の今後のご発展と猪瀬所長はじめ皆様のご健勝をお祈りして、お祝いの言葉とさせていただきます。今日は、ほんとうにおめでとうございます。



国立情報学研究所
知能システム研究系研究主幹 / 教授
上野 晴樹 (うえのはるき)

1964年防衛大学校卒業(電気工学専攻)、1971年東京電機大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。青山学院大学理工学部講師、東京電機大学理工学部教授、学術情報センター学術情報研究系教授を経て、2000年4月から現職。専門分野は、知識工学、情報工学、教育情報学。知識工学入門(オーム社)で第1回日刊工業新聞科学技術図書文化賞優秀賞(1985)、他に、人工知能学会功労賞(1996)等を受賞。COEプロジェクト「シンビオティック情報システム(SIS)の概念形成と実現技術の研究」代表。

21世紀の高度情報社会では、普通の人々が居ながらにして様々な情報サービスを受けられるという状況が想定されています。“誰でも、いつでも、どこでも”型情報環境ということができます。利用者の観点に立てば、“高度情報社会においては社会のあらゆる人々に先端ITを活用する権利がある”ということが出来るのではないのでしょうか。

一般に、ハード面での急速な進歩に(広義の)ソフトの進歩が追いつかないのは歴史が証明している事実です。実用化の初期段階ではごく限られた人だけが恩恵を受け、次の第二段階では一定の訓練を受けた人々がそうなり、成熟した第三段階になると誰もが特別の意識をしなくて先端技術の恩恵を享受するという状況になります。電話、テレビ、カメラ等は成熟した段階の技術の例です。

ITは、第二段階に入っていますが、第三段階には未だ入っていないといえます。情報リテラシー教育に国家が取り組まざるを得ない状況ですが、ごく普通の使い方ならば教育不要になるべきです。所謂“デジタルデバイド”で情報弱者が生ずることは不自然なことです。インターネットブラウザ、E mail、i mode等の出現によって先端ITが身近になったことは事実ですが、理想的目標からは遥かに遠いといえます。ITは汎用・多機能であるという大きな違いがあり、この点が解決を極めて困難にしています。

発想を転換して、人を教育・訓練する代わりに、“コンピュータや情報システムを教育・訓練する”という思考が必要であると思います。言替えると“賢い情報システム”の研究・開発が不可欠であるということです。実用的あるいは商業ベースに乗るような問題の解決は産業界の役割ですが、基本的な概念構築や長期的展望に立った基礎研究は大学やNIIのような大学共同利用機関の役割です。

シンビオティック情報システム(Symbiotic Information System :SIS)は、情報システムが人々の生活の中に溶け込んでいる状況を理想的目標とする研究課題として提案するものであり、高度情報社会における人と情報システムのあり方を究明し、その為の理論と技術を研究しようとするものです。これは賢いコンピュータを造るという点で、人工知能(AI)研究とは特に深い関わりがありますが、広く情報学の重要な課題であると考えています。NIIでは本年度より向こう5年間の

重点テーマの一つとしてこの研究課題にCOEプロジェクトとして取り組み始めたところですが、SISの概念形成、理論構築、技術研究を行い、具体的に分かりやすい学術デモシステムの試作・展示を通して、非専門家にも理解してもらい、ご教示を研究にフィードバックさせるつもりです。

SISは世界に先駆けて我々が提唱する研究課題ですが、現在SIS関連の研究は方々で行われております。人間機械協調、使いやすいコンピュータ、知的ヒューマンインタフェース、自然言語・音声対話、知的情報検索システム、ヒューマノイドロボット等の研究はこの例です。しかし実現目標から見ると未だ不十分であるばかりでなく、それぞれが個別に研究されています。我々はSISという概念によってこれらに統一的体系と長期的目標を与えようと試みています。

また、色々な学問研究の中で、IT研究には社会の要望に応えるというスタンスが必要ですが、SISの研究には特にこの点が重要であると考えています。残念ながら一般論として、我が国の多くのIT研究者には、流行の研究テーマは見えてもこのような思考のテーマは良く見えないように思われます。論文や研究コミュニティ内での議論等から得られるヒントは限られており、社会との交流から研究目標や研究テーマを探すという発想が、欧米とは異なった歴史と伝統文化を持つ我が国のIT研究に必要であると思います。

さて、シンビオティック情報システム(SIS)とは、人と情報システムが自然な形で共存する環境という意味であり、生物学上のsymbiosis(共生)からヒントを得た概念ですが、当面、次のように定義しています。「シンビオシスとは、組織(システム)の構成単位が夫々自律性を持ち、かつお互いの立場を尊重し、協調してコミュニティを構成している状態」で、これに基づいて形成されたコミュニティをシンビオティック・コミュニティと呼び、「シンビオティック情報システム(SIS)とは、人を含む情報システムがシンビオシスの概念によって構成されているもの」であります。これは典型的な学際領域の研究を必要とします。

NIIは情報学における我が国唯一の大学共同利用機関ですので、SISの研究は、国内・国外の大学、研究所、企業等と連携して推進することが肝要だと考えています。様々な形態での参加を期待しています。

国立情報学研究所公開講演会の開催

国立情報学研究所公開講演会は、研究所と関連の深い、大学・企業等の研究機関、図書館、情報処理センター等に勤務する研究支援職員を主な対象として、研究所の行う研究・開発等の普及を目的に、研究活動に関連した今日的課題について研究所内外の研究者が発表を行うものです。

平成12年度は、国立情報学研究所の設立初年度であることから、研究所の研究組織・研究活動の紹介などを主なテーマとして、東西2会場において開催し、合わせて330人を超える参加者を集めました。主な参加者は、大学等の図書館職員や研究者、一般企業や研究機関の職員・研究者等でした。

主催者挨拶に続き、研究所の4人の教官が、それぞれの立場から研究所の目指す情報学研究について講演を行った後、西会場では九州大学大学院システム情報科学研究院(九州大学附属図書館長)の有川節夫教授に、東会場では東京大学生産技術研究所長の坂内正夫教授に、国立情報学研究所に対する期待・提言などを含めた講演を行っていただきました。

参加者からは、研究所の研究活動内容がよくわかったという感想とともに、今後に対する期待の声も多く寄せられました。

今回の公開講演会の開催日時、会場、開催内容は次のとおりです。

1. 日時・会場

西会場：平成12年11月8日(水) 10:00 16:30

国立京都国際会館会議場A

東会場：平成12年11月22日(水) 10:00 16:30

学術総合センター 一橋記念講堂

2. テーマ

「情報学：情報の新たな地平を目指して」

3. プログラム

・主催者挨拶

国立情報学研究所所長事務取扱(企画調整官)
佐和隆光【西会場】



国立情報学研究所研究総主幹 小野欽司【東会場】

・情報学研究の将来像

- 国立情報学研究所が目指すもの -

[講師] 国立情報学研究所教授 小野欽司

・知能と人と情報システム

- シンビオティック情報システム(SIS)研究の勧め -

[講師] 国立情報学研究所教授 上野晴樹

・学術情報の流通と利用

- ビブリオメトリクスによる接近 -

[講師] 国立情報学研究所教授 根岸正光

・情報資源と情報学研究

[講師] 国立情報学研究所教授 安達淳

・情報学研究所への期待

[講師] 九州大学附属図書館長 有川節夫

【西会場のみ】

・情報学研究に期待するもの

- 人と社会への新たな価値を生む情報学へ -

[講師] 東京大学生産技術研究所長 坂内正夫

【東会場のみ】

・質疑応答

司会進行

国立情報学研究所国際・研究協力部長 濱田喬

【西会場】

国立情報学研究所教授 宮澤彰

【東会場】

(成果普及課)



NII 定例研究会の開催



国立情報学研究所は、「情報学(Informatics)」を研究対象とする大学共同利用機関として、国内外の大学、研究所、企業等と連携しながら、情報に関する学問の確立と、情報技術(IT)の進歩を通して広く社会に貢献することを目指して、2000年4月に発足しました。

「情報学」とは、人間の活動に必須である「情報」に関して、その性質や構造を明らかにするとともに、効率的な処理方法の実現や人間と社会との相互作用・伝達方法の解明など、「情報」に関する総合的な研究を行う学問です。また、情報学は、従来の情報科学や情報工学から人文社会科学や生命情報科学等の様々な学問分野を連携する学際領域であり、21世紀の高度情報社会の基盤となる新しい学問分野です。

本研究所は、このような情報に関する新しい学問の構築とその基礎研究を推進するために、7つの研究系、55の研究部門(内28客員部門:いずれも計画ペー

ス)を有し、更に学問の実証を行うための2つのセンターを併設しています。

情報学の研究には、深い専門知識と広く豊かな学識を要求され、異分野の緊密な関係によって初めて社会の期待に応えられる意義のある創造的な成果が生まれるものと考えています。本研究所では、このような基本理念に基づいて、個々の研究者による個別研究を基盤としつつ、研究系、研究部門としてのテーマ研究に加えて、組織横断的なプロジェクト研究を推進しており、さらに国内外の諸機関との共同研究も積極的に進めています。

しかし、本研究所は発足したばかりの組織であり、このような理念を実現するのは容易ではないことを十分に理解しており、皆様のご理解とご指導を得ながら、短時間で目標に近づくべく研究所を挙げて努力している段階です。

「NII定例研究会」は、まず研究所内における研究者間の相互理解を促進する手段の一つとして企画・運営しているものですが、開かれた研究機関として外部にも公開し、本研究所を適切に理解していただくと共に、より良い姿を求めめるためにご助力いただくことを期待するものです。

この定例研究会が、情報学の研究に関心のある研究者・技術者の交流の場となることができれば、それは我々の大きな喜びです。幅広い方々のご参加を心から期待しています。

(NII定例研究会企画グループ)

第1回9月20日

マルチメディア情報検索～研究動向と我々の取り組み～



情報メディア研究系 情報検索研究部門 助教授

片山 紀生 (かたやまのりお)

1990年東京大学工学部卒業、1995年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。学術情報センターシステム研究系助手、国立情報学研究所人間・社会情報研究系助手を経て、2000年10月から現職。専門分野はマルチメディアデータベースシステム、マルチメディア情報検索。

画像や映像などのマルチメディア情報を対象とする情報検索技術、すなわち、大量のマルチメディア情報の中から特定のものを見つけ出す技術について、我々の取り組みと研究動向について説明しました。マルチメディア情報を検索する場合、最も基本的な処理となるのは、特定の画像または映像に最も似ているものを見つけ出すという処理です。このような処理は類似検索処理と呼ばれます。

佐藤真一助教授(ソフトウェア研究系)と私のグループでは、この類似検索処理を高速化・効率化する技術として、インデックス構造ならびに探索アルゴリ

ズムについて研究を進めています。今回の発表では、この分野の研究動向を紹介しつつ、私たちのグループが提案している「SR tree」というインデックス構造と「有意性感応型最近接点探索法」という探索アルゴリズムについて説明しました。

SR-treeは、類似検索の高速化を目的とするインデックス構造です。マルチメディア情報から抽出した特徴量(特徴ベクトル)が大量にあるとき、SR-treeを用いてインデックスを作成することで、類似検索の高速化が可能になります。これは、SR-treeが、特徴ベクトルを効果的に木構造に振り分けるので、木構造

の一部の枝を調べるだけで検索結果を見つけることができるからです。一方、有意性感応型最近接点探索法は、検索結果がどの程度意味を持っているのか判定することで、検索処理の効率化を可能にする手法です。マルチメディア情報検索では、検索結果がどんぐりの背比べになってしまうことが少なくなく、10件なり100件なり検索結果を求めてみても、同程度の類似度

のものしか見つからないことがあります。この場合、検索結果を詳しく吟味する意味はほとんどなく、意味の低い検索結果となってしまいます。提案手法では、どんぐりの背比べとなっている場合とそうでない場合とを区別できるため、意味の低い検索結果に対しては検索処理を簡略化することができ、検索システムの効率を高めることが可能になります。

第2回 11月15日

オフィス移動ロボット Jijo-2 のアーキテクチャと音声対話



知能システム研究系 ロボティクス研究部門 客員教授 /
電子技術総合研究所 知能システム部主任研究官

松井 俊浩 (まついとしひろ)

1980年東京大学工学部卒業。工学博士。電子技術総合研究所研究員を経て1989年から同研究所知能システム部主任研究官、2000年11月から国立情報学研究所客員教授に就任。専門分野はロボット用のプログラミングシステム、幾何モデリング、移動ロボットなど。

現在、自動車や電化製品など、さまざまな工業製品が安価で入手できるのは、工場に導入されたロボットが正確な繰り返し作業を行っているからである。今後、経済が製造業から第3次産業への傾斜を高め、社会の高齢化が進むと、各種のサービスロボットの需要が高まると予想される。通産省のRWC(新情報)プロジェクトの一部では、オフィスを移動しながら情報サービスを提供するロボットとしてJijo-2ロボットの研究を行って来ている。

タスクとしては、道案内、人探し、配達、スケジュール調整などを想定している。そのために必要な地図の学習機能、場所と人の判別、音声による対話、およびこれらの機能を必要に応じて発現させるイベント駆動型の制御アーキテクチャなどの研究を行ってきた。現在のJijo-2は主にソナーによってナビゲーションを行うが、レーザーレンジファインダを用いればより正確な位置決めが可能であり、全周囲ビジョンを用いれば色、明るさの分布などの距離とは異なる情報を場所の識別に用いることができる。同時に周りで動く人を

発見できるであろう。また、どうしてもセンサーだけでは不十分であれば、近くにいる人に音声対話によって場所を聞けばよい。このように、多種のセンサーの情報を集めることで多様でロバスタな認識や行動決定を行おう、そうすると全体の構造が複雑になるので、なるべく自律的に行動を学習していくようにしよう、というのが研究的な興味である。



誤りを含む文字列データの近似マッチング法について



ソフトウェア研究系 データ工学研究部門 助教授

高須 淳宏 (たかすあつひろ)

1984年東京大学工学部卒業。1989年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。学術情報センターシステム研究系助教授を経て、2000年4月から現職。専門分野はデータベースシステム。

テキスト情報を活用するための全文検索や情報検索技術は、Webによる大規模テキスト空間の出現に

よって、高速、高性能化が進められている。一方、多くのテキストは印刷物として蓄積されてきており、こ

れら既存の情報を活用するためには、上記のテキスト情報処理技術に加え、印刷物からの情報獲得技術が必要不可欠となっている。印刷物を電子的に活用する技術は、OCRをはじめとする文書画像解析研究で開発されてきた。Webのようにもともと電子情報として作られた情報と印刷物から獲得された情報の大きな相違は、後者には獲得過程で用いられるOCR等の認識器に起因する認識誤りがデータに含まれることにある。本研究では、このような認識誤りを含む大量データを処理するための基本技術として、高速近似文字列マッチングの研究を進めた。近似文字列マッチングには、DPマッチング等の手法を適用できるが、これらの手法の多くは、対象データの長さに関係なく処理時間を必要とし、大規模テキストデータには必ずしも適した手法となっていない。そこで、本研究では、既存の近似マッチング法の前処理として、効率よく候補テ

キストを絞り込むインデキシング法を考案した。この手法では、マッチングの対象となる文字列の長さやマッチング精度およびヒット件数がトレードオフの関係にあることに基づき、検索文字列を適度な長さに分割して用いる。本研究で考案した近似文字列マッチング法を画像認識された参考文献データと書誌データベースのマッチングに適用した。現在、大規模な書誌データベースが構築されており、マッチングの対象となるデータベースには通常数百万件のレコードが含まれている。本研究で考案した高速近似マッチング法を適用することによって、単純にDPマッチングを用いた場合と比較して、2%程度の精度の低下と引き替えに平均で60倍程度の処理速度の向上を得ることができ、1件のマッチングに対して平均1.4秒と現実的な時間内での処理が可能になることを確認した。

NII 定例研究会の今後の予定

第3回：平成12年12月20日（水）15:00～17:00 学術総合センター12階1212・1213号室

「近代図書館情報管理の存立構造試論」影浦映人間・社会情報研究系助教授

ほか

第4回：平成13年1月17日（水）15:00～17:00 学術総合センター12階1212・1213号室

第5回：平成13年2月21日（水）15:00～17:00 学術総合センター12階1212・1213号室

第6回：平成13年3月21日（水）15:00～17:00 学術総合センター2階中会議室

第4回以降のプログラムについては決定次第ホームページでお知らせします。

国立情報学研究所では、「情報学」に関心をお持ちの研究者や技術者の皆さんの「NII定例研究会」への参加を歓迎いたします。詳しくはホームページ（URL：<http://research.nii.ac.jp/teirei/>）をご覧の上、「NII定例研究会企画グループ」までお問い合わせください。

羽鳥教授・浅野教授が通商産業大臣表彰

本研究所の羽鳥光俊教授（情報メディア研究系研究主幹／開発・事業部長）と浅野正一郎教授（情報基盤研究系研究主幹）が、10月16日、通商産業大臣表彰功労者に選ばれ、通商産業大臣から表彰を受けました。

羽鳥教授の表彰理由は、「光通信分野において、国内外を問わず、多種多様な標準化関連委員会の委員長を務め、多大な貢献をした」ことによるものです。

また、浅野教授の表彰理由は、「日本工業標準調査会の情報部会委員及びJTC1技術専門委員会委員等を歴任しJIS規格の審議及び国際標準化の推進に多大の貢献をした」ことによるものです。

今回の表彰では、「通商産業大臣表彰功労者」として25名、工業標準化貢献事業者表彰として3団体が選ばれています。

（広報調査課）

栗山和子リサーチ・アソシエイトが情報処理学会山下記念研究賞を受賞

本研究所の栗山和子リサーチ・アソシエイト（研究員）が、10月3日の情報処理学会第61回全国大会において、平成12年度山下記念研究賞を受賞しました。山下記念研究賞は、情報処理学会の研究会及びシンポジウム発表論文の中で特に優秀な論文に対して授与さ

れるものです。栗山研究員の受賞対象論文は、平成11年5月の情報処理学会情報学基礎研究会で発表した「大規模テストコレクション構築のためのプーリングについて：NTCIR 1の予備テストの分析」です。

（広報調査課）

共同研究の紹介：拡張型実時間分散OSの共同研究



国立情報学研究所では、全国の大学、研究機関や民間企業の研究所と連携・協力して、情報学研究を総合的に進めています。今回は、本研究所の丸山勝巳教授が主査となり、国際基督教大学の先生などと一緒に進めている研究をとり上げます。

OSとは

「計算機、ソフトウェアがなければただの箱」といわれるように、その多様な機能はソフトウェアによって実現されています。ソフトウェアは、大別すると「目的の処理をしてくれる応用プログラム」と「応用プログラムと計算機ハードウェアの間を取り持つ基本プログラム、つまりOS」とに分類できます。パソコンのOSとしては、Windows、MacOS (Macintosh) それに研究者間でよく使われるUNIX (Linux) 等が有名です。

電話交換網のような大規模な実時間システムでもOSは使われますが、適用分野ごとにOSに対する機能や性能の要求が大幅に異なるので、専用のOSを開発して使用しているのが現状です。

この研究では、適用分野の要求に応じて簡単に機能を追加したり性能を最適化したりできる、実時間分散OSの実現を目指しています。

大学でのOS研究を強化したい

OSはいちばん重要なソフトウェアですが、その研究開発は非常に困難で、いわゆる3K的な仕事になります。

まず、OSはコンピュータの「汚い」ハードウェアを直接制御するので、その構造も汚くなりがちです。一般の応用プログラムとは異なり、高度なプログラム開発環境を使えないのでプログラム開発が「きつい」、更に内容の形式化が難しく、また同分野の研究者が少なくして評価され難く、「厳しい」のです。

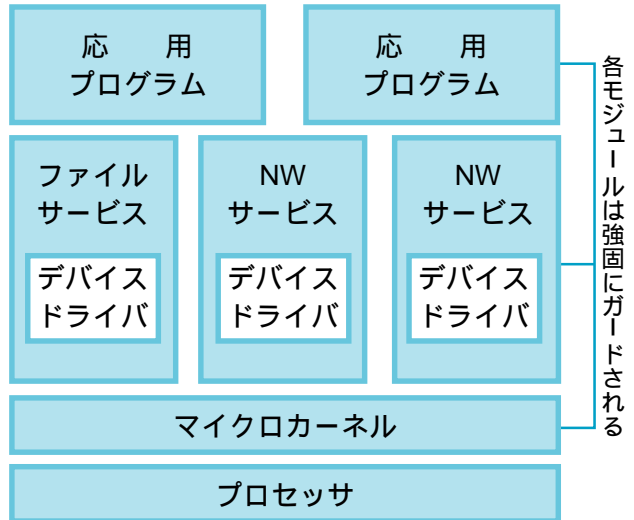
ある先生にOS研究が好きな若手研究者を探してい

共同研究グループ

たまたまメンバーの出張が重なり、出席の少なかった週。

左から、丸山教授、児玉助手、

中村国際基督教大学教授、橋爪教授



ると話したら、「最近の若手はOSのような苦勞の多い研究はしたがない」といわれてしまいました。

OSは重要なにもかかわらず、大学でその研究が行われることは少なくなってしまいました。情報学研究所の共同研究という仕組みを使えば、できるかもしれません。

研究でめざすOSは

家電や携帯機器などの小型組込みシステムから交換機のような実時間システムまで、広く適応できる拡張型OSの実現をめざしています。具体的には、OS構成を「サービスモジュール」と基盤制御を行う「マイクロカーネル」に階層化し、マイクロカーネルの上に、応用ごとのサービスモジュールの形でOS機能を作成して行きます。サービスに対応してモジュールを入替れば、いろいろな応用に適応可能なOSになります。

また、ネットワークに接続された多数の計算機が、協調して高度の処理を効率的に行えるようにするための、先進的な分散処理機構実現も目指しています。問題はサービスモジュールに頑強なガード機構を付けて、いかに安全に拡張可能にするかです。安易にそれを実現すると、性能が非常に低下します。

本研究では、ドイツのカールスルーエ大学で研究開発されたL4マイクロカーネルをベースにして、そこに、色々の工夫をすることにより、目的を達成しようとしています。

(ソフトウェア研究系研究主幹 丸山勝巳)

研究成果刊行物「情報学シリーズ」の刊行

情報学シリーズ1『学術情報サービス - 21世紀への展望 -』



国立情報学研究所監修
井上 如 深田良治
北 克一 宮澤 彰
田屋裕之 著
発行：丸善株式会社

国立情報学研究所の前身である学術情報センターの時代、毎年秋に学術情報センターシンポジウムが行われていた。1997年からこのシンポジウムの講演内容は、加筆修正を加えて単行書として出版されている。今回、学術情報センターシンポジウムの最後となった1999年秋の「21世紀の学術情報サービス」を単行書としてまとめるにあたり、国立情報学研究所監修の「情報学シリーズ」として刊行することになった。今後、当研究所の公開講演会や公開講座などをはじめ、当研究所の研究成果を広く社会に公開していくシリーズと

したいと考えている。

情報学シリーズ1となった『学術情報サービス - 21世紀への展望』は、コンテンツを中心に学術情報サービスの諸相を分析し、将来を考えるというテーマでまとめられた。最初に、図書・雑誌という印刷資料を中心とした伝統的な図書館での、情報システムの導入からこれまでの状況を客観的に振り返り、次いで、電子図書館や電子ジャーナルといった電子媒体による新しい情報提供サービスを、国立国会図書館、エルゼビア・サイエンス社の事例をもとに紹介する。また、将来の学術情報提供サービスについて、特に図書館との関連において考察する。最後に、収集という行動に対する分析がなされる。各章は、シンポジウムの講演に対応し、第1章「これからの図書館情報システム」(宮澤彰)、第2章「国立国会図書館の電子図書館」(田屋裕之)、第3章「電子図書館と図書館の将来」(北克一)、第4章「電子化ジャーナルの開く新しい世界」(深田良治)、第5章「オブジェクトとコレクティング行動」(井上如)となっている。

(実証研究センター長 宮澤彰)

情報学シリーズ2『知識モデリング』



国立情報学研究所監修
小山照夫 著
発行：丸善株式会社

1970年代に提唱された知識工学では、人間の持つ知識をいかにして計算機に利用させるかが問題とされた。このためには知識をモデル化して捉え、計算機処理可能な形で記述する必要がある。これは一般には知識表現の問題と呼ばれるが、その実体を考えるなら、知識のモデル化、すなわち知識モデリングの問題であると考えられるであろう。

1980年代を中心として、知識工学の実用化の試みがなされたが、これは基本的にはルール、フレーム、述語論理などの代表的な知識表現の枠組みの下に、実用的知識をモデル化して活用しようとする試みであっ

たといえる。ただ、この枠組みでは、知識をどのように記述すべきかは示されていても、目的とする問題解決のためにどのような知識が必要とされるかについては、必ずしも明確にされていたとは言えない。1980年代に開発された多くのシステムでは、開発の当初こそ、興味深いシステムであるという評価を得たものの、やがて維持していくことができなくなり、最終的には実用化されたとは言いがたいものがほとんどであった。

このことの反省に立って、1990年代には「オントロジー」というキーワードの下に、実際の問題解決のためにどのような知識が存在するかを明らかにしようとする一連の研究が行われてきたが、記述すべき知識に関する議論に決着をつけるには至っていない。

この本では、知識工学で提唱された基本的な知識モデリングの技術について歴史的経緯を考慮しながら述べるとともに、最近の課題である、知識として何を記述すべきかについての展望についても触れてみたつもりである。

(人間・社会情報研究系情報利用学研究部門
教授 小山照夫)

事業活動の紹介 - 目録所在情報サービス -

(1) 総合目録データベース

Webcat をご存知でしょうか？

「ある論文を入手したいが、掲載雑誌をもっている図書館はどこか」とか「書店等でもう入手できない古い書籍がどこかにないか」などの質問に答えてくれるのが、NII でサービスする Webcat です。

Webcat は、NII のホームページから誰でも手軽にアクセスできる図書館総合目録で、研究者・学生のみならず一般の方々からも広く利用されています。Webcat では、1,300 の図書館で所蔵する図書 500 万点と雑誌 23 万点の資料を検索することができます。どの図書館が所蔵しているかという所蔵情報データの合計は 5,000 万件以上にのぼり、日本最大の図書館総合目録となっています。

さて、この総合目録データベースを作るために NII が実施しているのが「目録所在情報サービス」です。このサービスは、データベースを構築するための目録システムとそれを利用して資料を共同利用するための ILL システムからなります。

(2) 目録システム (NACSIS CAT)

目録システムは 1985 年から運用しており、各図書館によるオンライン共同分担入力方式をとることにより、各図書館毎の目録作成の重複を防いでいます。ある図書館が一度入力した目録データは、他の図書館から共同利用することができるわけです。約 850 図書館からオンラインで毎週 15 万点の所蔵情報データが追加されており、日々、最新の目録所在情報が更新されています。また、海外、特に欧州・アジアの日本研究図書館での利用が増加しており、海外においても日本

語資料の目録作成システムとしての評価が高まっています。

一方、各図書館では、NII の総合目録を形成すると同時に、目録データをダウンロードして各々の図書館の蔵書目録データベースを構築します。図書館では、この蔵書目録データベースを用いて、利用者用オンライン目録 (OPAC) サービスを行ったり、閲覧・貸出等の各種図書館サービスを実施することができます。

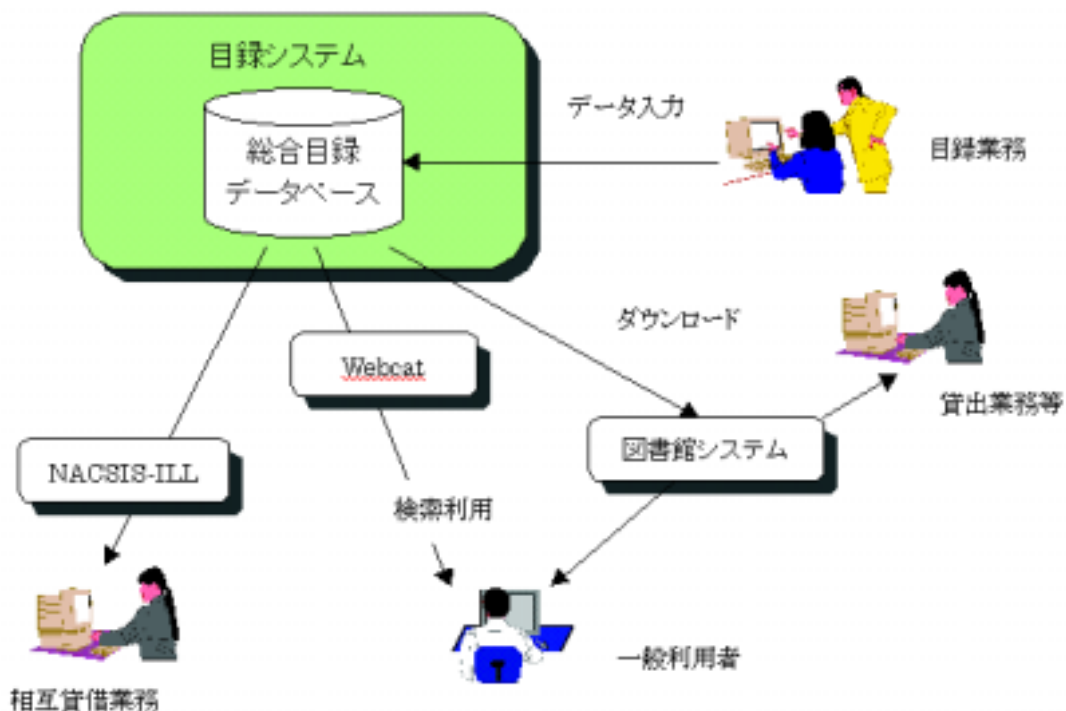
さらに、2000 年 1 月からは UCS という文字セットを採用し、多言語対応となりました。これにより、日英独仏露語のほかに、同時に中国語、ハングル等の文字を取扱うことが可能となり、それらの言語資料を総合目録に収録することができるようになってきました。

(3) 図書館間相互貸借システム (NACSIS ILL : Inter Library Loan)

1992 年から運用している図書館間相互貸借システムは、大学等の研究者に学術文献を提供するため、図書館同士での図書・雑誌論文の相互利用業務を支援するシステムです。現在、大学間の相互利用業務の 7 割はこのシステムを使っており、これにより研究者への迅速な文献提供を実現しています。

このように、目録所在情報サービスは、内外の図書館と連携して総合目録データベースを構築することにより、学術情報資源を共有することを目的としています。今後はさらに、海外の同種のシステムとの協力により、目録情報の相互参照や ILL 業務の連携を実現し、世界的な規模でのサービス展開を図ってゆきます。

(コンテンツ課)



DATABASE 2000 TOKYO への出展



内外のデータベースを一堂に集めた、わが国最大のデータベース総合展である「DATABASE 2000 TOKYO」が、平成12年10月18日（水）から10月20日（金）の3日間、東京国際フォーラム展示ホールにおいて、財団法人データベース振興センター及び日本データベース協会の主催により開催されました。

国立情報学研究所も、研究所の活動の紹介と提供する各種サービスの普及を目的として、この展示会に出展し、電子図書館サービス（NACSIS ELS）、情報検索サービス（NACSIS IR）及び、本研究所のホーム

ページ上で無料公開している総合目録データベースWWW検索サービス（WebCAT）、研究活動資源ディレクトリ（NACSIS DiRR）、研究者公募情報（NACSIS CIS）などのデモンストレーションを行いました。来場者からは、出展担当者に対して矢継ぎ早に質問が寄せられるなど、高い関心を集めていました。

なお、主催者の発表による展示会の出展社・団体数は111社・団体で、3日間の総入場者数は35,921人でした。（成果普及課）



東南アジア科学技術情報流通プログラムへの協力

ハノイにおけるワークショップ
オープニング・セッション
討議セッション



「東南アジアにおける科学技術情報・経験・専門知識交換協力プログラム（CO EXIST SEA）」は、科学技術振興事業団の主催により、東南アジア諸国の科学技術情報機関による協力体制の構築を目的として、国立情報学研究所、インドネシア科学院科学文献情報センター（LIPI/PDII）、マレーシア科学技術情報センター（MASTIC）、フィリピン科学技術情報研究所（STII）、タイ国家研究評議会研究情報センター（NRC/RIC）、ベトナム国立科学技術情報文献センター（NACESTID）の各機関が参加して、平成11年に開始されました。

平成11年6月にクアラルンプール（マレーシア）で「研究開発を支援する情報基盤の形成に向けて」をテ



マに第1回ワークショップが開催されたのに引き続き、本年は10月10日から11日の日程で、ハノイ（ベトナム）において「アジア太平洋の科学技術情報の共有化に向けて：ディレクトリのディレクトリ」をテーマに第2回ワークショップが開催されました。今回のワークショップでは、東南アジア諸国

における科学技術データベースの整備の現状に関する情報交換を行うとともに、これらデータベースの共有に向けた課題について検討されました。国立情報学研究所からは、内藤衛亮人間・社会情報研究系研究主幹と秋山和男国際・研究協力部広報調査課長が出席し、国立情報学研究所における学術データベースの概要、特に「研究活動資源ディレクトリ（NACSIS DiRR）」に焦点を置いたプレゼンテーションを行いました。各国からは、アジアにおける科学技術情報データベースの整備が急務であることが確認される一方、そのためのリソースの不足や言語の問題などの課題が提起されました。

また、CO EXIST SEA 参加機関における情報担当の人材育成を目的とする研修が、科学技術振興事業団と国立情報学研究所の共同により、11月6日から10日の日程で行われました。この研修コースには、東南アジアの5機関から各2名のほか、国内からも国立国

会図書館など5機関から計8名が参加しました。科学技術振興事業団では、同事業団の「研究開発支援総合ディレクトリ（ReaD）」に関する説明と実習を行い、国立情報学研究所では、細部博史ソフトウェア研究系プログラミング言語研究部門助手が、次世代の文書フォーマット規格XMLを対象としたJavaプログラミング技術に関する講義を行いました。

今日の世界的規模での情報通信技術（IT）の進歩と普及により、東南アジア諸国でも科学技術情報の整備と流通は大きな課題となっています。このようなワークショップや研修コースを通じた日本からの支援と協力が大きな期待が寄せられています。

（広報調査課）



国立情報学研究所における研修



「21世紀における日本情報」ワークショップへの参加



ベルリン日独センターにおけるワークショップ

ベルリン日独センターが主催し、国立情報学研究所が後援したワークショップ「21世紀における日本情報 - ドイツ語圏日本関係図書館の新しい課題」が、ドイツのベルリン日独センターにおいて、11月2日から3日の日程で開催されました。このワークショップには、ドイツ語圏諸国で日本情報を必要とする研究機関や図書館等に勤務する人たちが参加し、総勢は、講演者等を含め61名となりました。セミナーには、ドイツ国内だけでなく、オーストリアのウィーン大学などのドイツ語圏諸国からの参加もありました。

国立情報学研究所からは、内藤衛亮人間・社会情報研究系研究主幹、宮澤彰実証研究センター長、布施勇開発・事業部アプリケーション課長、小陳左和子同課ネットワークソフトウェア技術係長が出席し、「目録所在情報サービス（NACSIS CAT）のヨーロッパにおける展開」、「日本の学術情報発信の高度化を目指して」と題した講演とともに、国立情報学研究所が提供している情報検索サービス（NACSIS IR）やNACSIS CATなどのサービスの紹介とデモンストレーションを行いました。講演後の質疑応答においては、国立情報学研究所のサービスに対する参加者からの期待の声

が多く聞かれました。

また、セミナー参加者を対象に、NACSIS IRと図書館間相互貸借システム（NACSIS ILL）の利用評価実験を行うこととし、この評価実験への参加の有無や日本情報入手の現状等を問うアンケートを行いました。評価実験参加者には、平成13年3月までNACSIS IRとNACSIS ILLのサービスを利用してもらい、これらのサービスが日本情報入手にどのように貢献したかなどの評価を行ってもらう予定です。

ワークショップに引き続き、11月6日及び7日の日程で、由緒ある古城と紅葉に染まった小高い山に囲まれたハイデルベルク大学を宮澤教授、布施課長、小陳係長の3名が訪れ、同大学日本語学科図書室において、同大学のほかチュービンゲン大学及びミュンヘン大学の教官や司書10名に対して、WebUIP（インターネットによる目録情報簡易入力システム）と個別版WebOPAC（目録検索システム）のデモンストレーションを行いました。その場での熱心な質疑応答とともに、その後のフォローアップの結果、ハイデルベルク大学及びミュンヘン大学を中心にWebUIPと個別版WebOPACを用いたNACSIS CATの利用が、その実現に向けて大きく前進していく見込みとなりました。

（アプリケーション課）



ハイデルベルク大学におけるデモンストレーション

人事異動（平成12年10月～11月）

採用 平成12年11月1日付

Nigel Henry Collier(ナイジェル・ヘンリー・コリアー)
情報学基礎研究系記号科学研究部門助教授
前職：東京大学大学院理学系研究科リサーチ・アシ
シエイト

岡田 仁志

人間・社会情報研究系情報制度論研究部門助教授
前職：大阪大学大学院国際公共政策研究科寄附
講座助手

客員部門採用 平成12年11月1日付

菅原 秀明

情報学基礎研究系生命情報科学研究部門教授
本務先：国立遺伝学研究所生命情報研究センター教授

米澤 明憲

ソフトウェア研究系大規模ソフトウェア研究部門教授
本務先：東京大学大学院情報学環教授

神内 俊郎

情報メディア研究系コンピュータビジョン研究部門教授
本務先：株式会社日立製作所試作開発センタ長

松井 俊浩

知能システム研究系ロボティクス研究部門教授
本務先：電子技術総合研究所知能システム部主任
研究官

安田 靖彦

実証研究センター超高速ネットワーク研究室教授
本務先：早稲田大学理工学部教授

川原崎 雅敏

実証研究センター高品質ネットワークワーキング研究室教授
本務先：日本電信電話株式会社サービスインテグレ
ーション基盤研究所主幹研究員

五神 真

実証研究センターフルテキストコンテンツ研究室教授
本務先：東京大学大学院工学系研究科教授

絹川 博之

実証研究センターバーチャルライブラリ研究室教授
本務先：東京電機大学工学部教授

村上 征勝

情報学資源研究センターデータコレクション研究室教授
本務先：統計数理研究所領域統計研究系教授

森下 真一

情報学基礎研究系生命情報科学研究部門助教授
本務先：東京大学大学院新領域創成科学研究科
助教授

吉川 正俊

ソフトウェア研究系大規模ソフトウェア研究部門助教授
本務先：奈良先端科学技術大学院大学情報科学
研究科助教授

中村 裕一

情報メディア研究系コンピュータビジョン研究部門助教授
本務先：筑波大学機能工学系助教授

武藤 伸洋

知能システム研究系ロボティクス研究部門助教授
本務先：日本電信電話株式会社サイバーソリューシ
ョン研究所主任研究員

漆谷 重雄

実証研究センター超高速ネットワーク研究室助教授
本務先：日本電信電話株式会社ネットワークサービ
スシステム研究所主幹研究員

瀬崎 薫

実証研究センター高品質ネットワークワーキング研究室助教授
本務先：東京大学生産技術研究所附属概念情報
工学研究センター助教授

浦本 直彦

実証研究センターフルテキストコンテンツ研究室助教授
本務先：日本アイ・ピー・エム株式会社東京基礎研
究所主任研究員

岸田 和明

情報学資源研究センターデータコレクション研究室助
教授
本務先：駿河台大学文化情報学部助教授

所内異動 平成12年10月1日付

片山 紀生

情報メディア研究系情報検索研究部門助教授
前職：人間・社会情報研究系情報図書館学研究部
門助手

所内異動 平成12年10月12日付

佐和 隆光

国立情報学研究所長事務取扱
企画調整官（副所長）

所内異動 平成12年11月1日付

小野 欽司

情報学基礎研究系研究主幹（併任）
情報基盤研究系情報流通基盤研究部門教授，
研究総主幹（併任）

後藤田 洋伸

人間・社会情報研究系情報利用学研究部門助教授
前職：人間・社会情報研究系情報利用学研究部門
助手

西澤 正己

実証研究センター共同研究企画推進室助教授
前職：実証研究センター共同研究企画推進室助手

猪瀬博国立情報学研究所長の逝去



平成12年10月11日、本研究所の猪瀬博所長が心不全のため自宅にて逝去しました。猪瀬所長は、昭和2年1月5日生まれ、享年73歳でした。東京大学第二工学部出身、東京大学名誉教授、専門は情報工学、特に、デジタル通信の分野に深く携わりました。昭和31年、東京大学工学部助教授となり、昭和36年同教授、昭和61年には工学部長を務めました。同時に、昭和61年に国立情報学研究所の前身である学術情報センターの所長となり、本年4月、国立情報学研究所への改組に伴い、本研究所の初代所長に就任したばかりでした。

猪瀬所長の研究業績のうち、特筆されるべきものは「タイムスロット入替え交換方式」で、これは現在広く使われている電子電話交換機の基本方式となっています。猪瀬所長は、タイムスロット入替えを1956年の米国留学中に発明し、当時滞在していたベル研究所から特許として公表しました。その後、東京大学工学部に戻ってからは、都市の交通管制システム開発に携わり、交通信号を中央コンピューターから集中制御することで交通渋滞の緩和を実現するなど、この方面でも先駆的な業績を挙げました。

1970年代、米国がネットワークによる情報提供のインフラストラクチャーを急速に整備していることに注目、このままだと一国による研究情報の統制が行なわれてしまうという危機意識を持ち、我が国におけるオンライン・データベース産業の振興を提言し、実行しました。当時の石油危機が「油断」と表現されたのを模り、来るべき情報危機を「情断」と表現しました。これは現在のIT問題を先見したものです。

猪瀬所長の著書として研究分野に属するものは、“An Introduction to Digital Integrated Communications Systems”(University of Tokyo Press 1979)が挙げられますが、広く一般に情報技術の重要性を訴えるものとして、『情報の世界を生きて』(東京大学出版会1987)『情報技術と文明(別冊サイエンス)』(日経サイエンス社1983)『センター・オブ・エクセレンスの構築』(日経サイエンス社1990)



があります。

また、奥様との共著で、詩集『Festina Lente』(ラテン語で「ゆっくり急げ」の意 三田出版会1993)等が出版されています。しかし、ご本人はこの言葉を果たされることなく、駆け足で走り去ってしまわれました。

これらの研究業績に加え、科学技術行政にも幅広い寄与をしました。例えば、学術審議会や産業技術審議会の会長、経済協力開発機構(OECD)科学技術政策委員会議長等の要職を務めました。

猪瀬所長のこれまでの業績に対し、多くの学術賞やメダルが贈られています。

昭和51年 マルコニ国際学術賞

昭和54年 日本学士院賞

昭和57年 IEEE(米国電気電子学会)国際コミュニケーション賞

昭和60年 文化功労者顕彰

平成3年 文化勲章

平成6年 IEEEアレキサンダー・グラハム・ベル・メダル

平成9年 エリクソン・テレコミュニケーション・アワード賞

平成12年 IEEEサード・ミレニアム・メダル

平成12年 勲一等瑞宝章

また、多くの国際学術団体から名誉会員称号を贈られました。これらを挙げると、

全米科学アカデミー、全米工学アカデミー、スウェーデン王立理工学アカデミー、英国王立工学アカデミー、英国王立研究所等の外国人会員、IEEE(米国電気電子学会)のフェロー、日本学士院会員などがあります。

国立情報学研究所では、猪瀬所長の功績を偲んで11月27日に研究所葬を行いました。多数の方のご参列に御礼申し上げますとともに、謹んで故人のご冥福をお祈りいたします。

Information お知らせ

WAINS7: The 7th International Workshop on Academic Information Networks and Systems

「第7回学術情報ネットワークとシステムに関する国際ワークショップ」

平成12年12月7日(木)~8日(金) カセサート大学(タイ)

主催: 国立情報学研究所、タイ国立電子コンピュータ技術センター(NECTEC) カセサート大学

詳しくは <http://naist.cpe.ku.ac.th/wains7/> をご覧ください。

IWS2001: International Workshop on Next Generation Internet and its Applications

「次世代インターネットとその利用に関する国際ワークショップ」

平成13年2月21日(水)~23日(金) 学術総合センター 一橋記念講堂(東京都千代田区一ツ橋)

主催: 国立情報学研究所、科学技術振興事業団

第2回 NTCIR (NII-NACISIS Test Collection for IR Systems) ワークショップ成果報告会

国立情報学研究所と内外の研究機関・研究者との共同による「情報検索システム評価用テストコレクション構築プロジェクト」の第2回ワークショップの成果報告会を開催します。

平成13年3月7日(水) 学術総合センター中会議場(東京都千代田区一ツ橋)

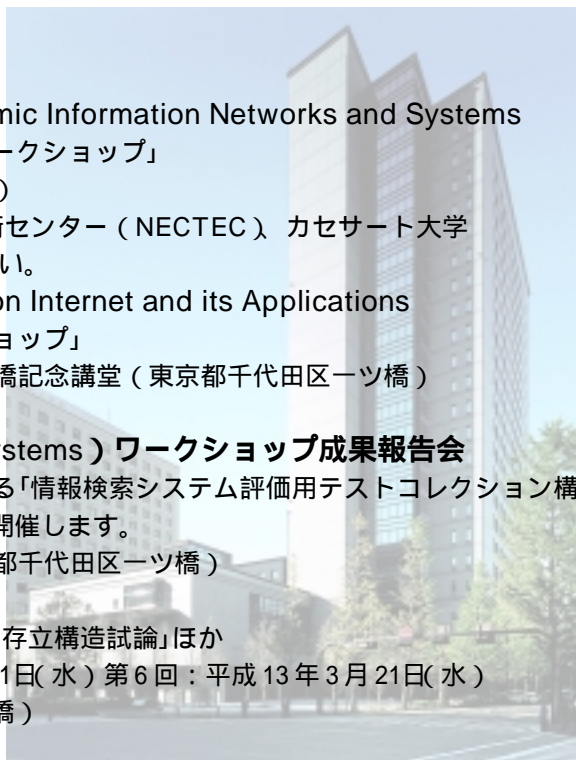
NII 定例研究会

第3回: 平成12年12月20日(水) 「近代図書館情報管理の存立構造試論」ほか

第4回: 平成13年1月17日(水) 第5回: 平成13年2月21日(水) 第6回: 平成13年3月21日(水)

学術総合センター12階会議室ほか(東京都千代田区一ツ橋)

詳しくは本文6~8頁をご覧ください。



ドメイン名の変更について(予告)

国立情報学研究所では、目録所在情報サービスなどの各サービスのドメイン名を nacsis.ac.jp から nii.ac.jp へ移行することとなりました。このため、各利用者のシステムにおいて、本研究所の各サービスへのリンクや呼び出し等の各種設定を、平成13年4月1日から平成13年10月31日までの間に、変更していただくことが必要となりました。

新ドメイン名 **nii.ac.jp**

移行スケジュール

国立情報学研究所のシステム移行期間: 平成12年12月1日から平成13年3月31日まで

各利用者の移行期間: 平成13年4月1日から平成13年10月31日まで

各利用者の皆様には、大変ご迷惑をおかけしますが、この移行期間内に変更していただくよう、よろしくお願いいたします。なお、詳細については、国立情報学研究所のホームページ (http://www.nii.ac.jp/index_j.html) をご覧ください。

(ネットワークシステム課)

学術情報ネットワークのノード(接続拠点)の新設

学術情報ネットワークのノード(接続拠点)を平成12年12月より東京農工大学(東京都小金井市)に新設しました。この地域に近接する大学等の研究機関で、新たにSINETに加入を希望する機関、あるいは、既に加入している機関のうち、接続ノードの変更を希望する機関は、下記までご連絡ください。

連絡先: 国立情報学研究所開発・事業部ネットワークシステム課ネットワーク開発企画係

所在地: 〒101 8430 東京都千代田区一ツ橋2 1 2

電話: 03-4212-2255 FAX: 03-4212-2270 e-mail: ipnoc@sinet.ad.jp

(ネットワークシステム課)

国立情報学研究所の研究・事業活動について詳しくはホームページもご覧ください。 <http://www.nii.ac.jp/index-j.html>



NII News 国立情報学研究所ニュース 第2号 平成12年12月

発行 国立情報学研究所

NII News に関するお問い合わせは国際・研究協力部 広報調査課まで

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2 学術総合センター TEL:03-4212-2132 E-mail:wwwadm@nii.ac.jp